別紙２

審査結果の要旨

論文提出者氏名　シルビア・グアダルーペ　・ノベーロ・イ・ウルダニビア
(Silvia Guadalupe Novelo y Urdanivia)

本論文は、メキシコの外交官、詩人、ジャーナリストであったホセ・フアン・タブラーダ(1871-1945)の新聞コラムや詩を切り口として、メキシコの近代化について考察し、メキシコ人が問いかけ続けているアイデンティティーの問題と、ラテンアメリカをめぐって繰り返されてきたユートピア言説を検証する論文である。

本論文は、6 章から構成され、前半 3 章はラテンアメリカおよびメキシコの思想史を概観し近代化の問題について考察し、第 4 章、第 5 章でタブラーダの新聞コラムを中心に取り上げ、最後の第 6 章で、ラテンアメリカ及びメキシコのユートピア言説について論ずる。

第 1 章「ひとつの哲学にむけて」は、ラテンアメリカ及びメキシコにおいて、独自の哲学の構築が模索されてきたことを概観し、ラテンアメリカ諸国は、独立戦争期以前から、アイデンティティーを求めて自分たちの哲学の探求が試みられてきたが、独自の思想形成にはいたらなかったことを述べる。また 19 世紀末からラテンアメリカで起こったモデルニスモ文学運動において、文学とジャーナリズムの密接な関係が始まり、進歩主義的な政治思想形成に寄与したが、とりわけ新聞コラム（クロニカ）は、モデルニスモ作家の文学実験の場となった、ということを指摘する。

第 2 章「近代化とモデルニスモのイデオロギー」では、近代化（modernización）とモデルニスモ（modernismo）の関係について考察する。19 世紀末、ラテンアメリカのエリートたちは、欧米をモデルとし、欧米と肩を並べることを希求した。モデルニスモ作家は、実証主義を掲げる政治権力を支持することの見返りにその庇護を受け、特権を享受した。モデルニスモとは、近代化への希求の体現であり、近代化の夢と幻想のうえに成り立つ芸術運動であった。その意味でナショナルアイデンティティーの形成に関与した。ラテンアメリカではモデルニスモとナショナリズムが混ざりあい、モデルニモはユートピアの要素を内包している、ということを論ずる。

第 3 章「ラテンアメリカにおけるイデオロギーの構築」では、モデルニスモとナショナリズムの関係について考察する。19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、モデルニスモの若い作家たちにおける、近代国家の構築、あるいは普遍的な新しい文化創成の願望は、祖国の社会・政治・経済発展を進める動力であった。モデルニスモ作家が執筆した新聞コラムは、文学としての審美的な面で完成された文章を目指すと同時に、祖国の近代化への関与の仕方を表現していたことを論ずる。

第 4 章「タブラーダの近代化におけるモデルニスモ」では、タブラーダの新聞コラムについて検討する。彼の作品、とりわけ新聞記事やコラムは、コスモポリタン主義的視点が顕著であり、身の回りの現実社会の問題を直視することを避けていた。本章では、1936 年から 1939 年に新聞連載され「昼と夜のメキシコ」のコラムを取り上げ、そこから読み取れるものは、近代化の実態（メキシコの現実）と近代化への希求（タブラーダが思い描く理想のメキシコ）の間の不安定な緊張関係であり、それは、メキシコ性というアイデンティティーが欠如したまま進められた近代化における不安定さの反映である、と分析する。

第 5 章「タブラーダとメキシコ性の矛盾」では、タブラーダの経歴に触れつつ、メキシコ性についてのその矛盾した態度を検討する。タブラーダはポリフィリオ・ディアス政権の特権的知識人グループに属しており、彼らのモットーの「平和・秩序・進歩」がタブラーダの判断基準となった。ジャーナリストとして読者に情報を提供しつつ世論を形成する役割を担いながら、彼はメキシコ社会の現実を正しく理解することがなく、混血 mestizaje に基づくメキシコ性の払拭こそが近代化の証しであるとみていたことを指摘する。

第 6 章「ラテンアメリカの現実におけるユートピア概念」では、ユートピアをめぐるいくつかの著作を通して、ラテンアメリカにおける共同幻想としてのユートピアの概念を検討する。ハイブリッドな文化を特徴とするラテンアメリカにおいて「我々は何者か」という問題をどう考えるかについて、多くの思想家がさまざまな提案をしてきたことを検討する。

以上が概要である。本論文の主たる功績は以下の 3 点にまとめられる。

第一は、従来タブラーダは、モデルニスモの詩人として、またスペイン語で俳句を作りのちのスペイン語詩に大きな影響を与えた人物として論じられることが多かったが、その詩ではなく、新聞コラム（クロニカ）に着目した点である。モデルニスモ詩人のクロニカは近年になってその価値が見直されてきているが、クロニカを通して近代化の問題を論ずるというのは、タブラーダ研究としてこれまでにない画期的な研究である。

第二は、タブラーダのクロニカ分析を通して、メキシコの近代化の本質を読み取ろうとするにとどまらず、ラテンアメリカの近代化という大きな文脈のなかにおいて、タブラーダの問題を論じている点で、これは本論文のきわめて重要な寄与である。

第三は、メキシコの近代化の矛盾が、現代メキシコ社会の諸問題と連続しており、この事実を正面から議論する必要があるという強い問題意識と、またメキシコ人が問いかけ続けているアイデンティティーの問題は、メキシコ人である筆者自身の問題として問わなければならないものだとする問題意識が論文を貫いており、このことが論文で展開される議論を深く、真摯なものにしているという点である。特筆すべきは、主観的・断定的な論調に陥ることなく、幅広い先行研究を参照しながら慎重に議論を進め説得力をもたせることに成功した点である。

審査では次のような問題点・要望が指摘された。1. 広範な文脈のなかにタブラーダを位置づけ論じることを重視したために、タブラーダその人の伝記的情報やクロニカ以外の作品についての記述が手薄になっている。 2. タブラーダが近代化に対する自らの立ち位置をどう考えていたかについての議論がなされることが望ましい。 3. タブラーダのクロニカが、1930 年代のメキシコでどのように受け取られたのかについての言及がほしい。 4. なぜ 30 年代に書かれたクロニカを中心に取り上げたのかについての根拠を明確に述べてほしい。 5. 引用の仕方などに不備が見られる。 6. 引用が続き、論旨の展開が明快でないところがある。

しかしこれらはいずれも、本論文の全体としての質の高さを、本質において損なうものではない。この論文が、この領域の研究において大いなる寄与を果たしたことは間違いないと判断される。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。